

女性の一命を救った救命の連携

2月5日に社会福祉法人達生堂の特別養護老人ホーム「ヒューマン・ハウス」のショートステイを利用していた83歳の女性が、急に容態が悪くなり、城西病院で受診した結果、緊急手術が必要と判断。県のドクターヘリを要請し、水戸済生会に搬送、緊急手術をし無事に一命をとりとめました。

最初に女性の異変に気付いたのは、ヒューマン・ハウス2号棟の大吉敏子介護員。「午前10時にばらユニットに行くと、女性が車いすでぐったりしているのに気付いた。近づくとも顔色が悪く、『痛い、助けて』と言っていました」と当時の様子を語ります。顔色が悪い上に、声が弱々しく、左手に水をかけたような大汗が出ていたといいます。すぐにバイタルとサーチレーションを測定するとともに、2号棟の看護師に連絡。山田妙子看護部長は、すぐに城西病院を受診する必要があると判断し、受診。村田智史医師は大動脈解離と診断し、緊急手術が必要と判断してドクターヘリを要請。茨城県のドクターヘリは午後3時ごろに水戸済生会に緊急搬送し、午後9時過ぎに無事手術が終わりました。

この女性は、ヒューマン・ハウスのショートステイに2月2日に入所、7日に帰宅を予定。大腿骨を骨折してから在宅介護になり、ショートステイやデイサービスをよく利用しているといいます。

大吉介護員によると、女性は少し人見知りをする性格で、気にかけて話をしているうちに、昔のこと、ご主人のこと、趣味の話などをよくするようになっていたといいます。骨折の影響で、ふだんから「痛い」という訴えをし、昨年暮れには城西病院で大動脈瘤があ



るとの診断を受けていました。

「大動脈瘤の診断を受けていたと聞いていなければ、いつもの『助けて』という訴えと見過ごしていたかもしれません。近寄ると、胸が痛いといい、ユニットの介護員や看護師を呼びました。看護師の判断が素早かったです」と振り返ります。

関係者は口をそろえて「当たり前のことをやっただけです。でも、早く異変に気付き、対応することができ、何よりも女性の手術が無事に終わったことがよかったです」と話していました。

城西病院の白石裕比湖病院長は「ふだん通りの活動の中で、利用者とスタッフ、スタッフ間のよいコミュニケーションと、施設と病院、ヘリポートが隣り合う環境で迅速な対応が取れた。何より、老人ホームの介護員の気付きがあり、次につなげるチームワークがあったからこそ、生命の危機に直結する状況に適切に対処することができた。達生堂グループはこれからも、地域や患者さま、ご利用者に密接に寄り添い、地域の医療・福祉に力を尽くしていきたいと思っております」と話していました。

2002年2月8日



ヒューマン・ハウスのばらユニットと関連したスタッフたち